

# 『レオン方言』(1906年)から 『アストゥリアス語文法』(1998年)へ

—形態の比較—

廣 澤 明 彦

## 0. はじめに

スペインを代表する文献学の泰斗、メネンデス・ピダル (Menéndez Pidal, Ramón) 著『レオン方言』(“El dialecto leonés”, 1906年)は、かつて13世紀にレオン王国が最大に拡大していた領域に注目し、そこで確認された20世紀初頭までの言語的特徴をまとめた名著である。

本稿はその『レオン方言』と、レオン方言域に含まれるアストゥリアス州の言語アカデミーが刊行した『アストゥリアス語文法』(“Gramática de la llingua asturiana”, 1998年)を比較し、標準アストゥリアス「語」の接頭辞、接尾辞、人称代名詞、所有代名詞、定冠詞の形態の中に見出されるレオン方言的なものをまとめたものである。

### 0.1. 『レオン方言』(1906年)

メネンデス・ピダルは上掲書 (§2.) の中で、レオン方言の地域を分類している。

まず西部レオン方言域としてはアストゥリアス州の西部アストゥリアス、そこから南のカンタブリア山脈を越えた西部レオン (レオン県)、西部サモーラ (サモーラ県) が挙げられている。尚この2つは現在カスティーヤ・イ・レオン州にある。そしてポルトガル領ミランダ・ド・ドウロ (「ミランダ方言」) 及びリオ・デ・オノールもこの方言域に含まれる。

中央レオン方言に関しては

「[……中央レオン方言は]<sup>1</sup> 今日アストゥリアスにおいてのみ知られているが、それについては後述する。しかしながら現在の南部、東部のレオン方言の境界線はかつてと大きく変わっている。というのもカスティーヤ語の流入が顕著であるからだ。」(『レオン方言』 §2.)

とある。

東部レオン方言域には東部アストゥリアス、東部レオン、東部サモーラ、サンタンデル<sup>2</sup>、サラマンカ (カスティーヤ・イ・レオン州)、エクストゥレマドゥーラ州が含まれる。尚本稿では、特に断りのない場合、「レオン方言」とはメネンデス・ピダルが述べるレオン方言域の方言を指し、「レオン県の方言」とは区別している。

広大なレオン方言域の北部に位置するアストゥリアス州のアストゥリアス方言は西部、中央、東部に分類されるが、これもメネンデス・ピダルが『レオン方言』で行ったものが伝統的に用いられている。廣澤 (2001, §1.3.) でも触れたが、その3分類の大まかな境界は、次のようになる。ナロン (Nalón) 川以西からナビア (Navia) 川流域にまたがっているのが西部アストゥリアス方言域、ナロン川以東

1 引用中、筆者の補足を [ ] 内に加えた。以下同様。

2 サンタンデルは『レオン方言』出版当時の県の名称であり、現在のカンタブリア州カンタブリア県に対応する地域である。したがって現在同州の州都であるサンタンデル市とは区別される。以下に挙げるサンタンデルに関しても同様である。

セヤ (Sella) 川の間は中央アストゥリアス方言域, そしてセヤ川以東が東部アストゥリアス方言域となる。つまり大まかな境界線は川がその役割を果たし, アストゥリアス方言の細かな分化 (諸バブレ) には山や谷といった地形が関わるといえよう。

尚メネンデス・ピダルは『スペイン語歴史文法手引書』 (“Manual de gramática histórica española”, 1904年。以下『手引書』) を先に執筆しており, そこから『レオン方言』にいくつかの引用を行っている。本稿でもこの『手引書』を参照した。

## 0.2. 『アストゥリアス語文法』 (1998年)

アストゥリアス言語アカデミー (Academia de la Llingua Asturiana) は1981年に『正書法規則』 (“Normes Ortográfiques”, 以下『正書法』), 1998年に『アストゥリアス語文法』 (以下『文法』), 2000年には『アストゥリアス語辞典』 (“Diccionariu de la Llingua Asturiana”, 以下『辞典』) を刊行した<sup>3</sup>。本稿では『レオン方言』の中で取り上げられている「アストゥリアス方言」とは区別して, 『文法』, 『正書法』, 『辞典』の中で扱われている事項を「標準アストゥリアス語」と呼ぶ。

尚2000年には『アストゥリアス州の郡市町村名, 教区名一覧』 (“Nomes de conceyos, parroquies, pueblos y llugares del Principáu d’Asturies”) が刊行された。これはアストゥリアス州の全地名をアストゥリアス語で表したもので, カスティーヤ語 (スペイン語) の表記と大分異なる場合がある<sup>4</sup>。

アストゥリアス方言は『レオン方言』の中でも言及されているように (§2.2., 2.3. など), 中央, 西部, 東部に分類される。標準アストゥリアス語は基本的に中央アストゥリアス方言をもとに定められたものとされているが, のちに (本稿 §6. など) 見るように, 中央アストゥリアス方言的でなくとも西部レオン方言的特徴を伴うものが, 『文法』に記載されているのが確認される<sup>5</sup>。

## 0.3. ナビア-エオ (Navia-Eo) 地域

アストゥリアス方言は中央, 西部, 東部に分類されているが, アストゥリアス州西部のナビア川とガリシア州境を流れるエオ川に挟まれた地域であるナビア-エオ地域では, 西部アストゥリアス方言とは区別されたガリシア語の変種の使用が確認されている。その正書法をまとめた『アストゥリアスのガリシア語の正書法及び形態の規範』 (“Normes ortográficas e morfológicas del galego de Asturias”, 以下『アストゥリアスのガリシア語』) を本稿では参照した。

## 0.4. バブレ

アストゥリアス州は, 北部はカンタブリア海に面し, 南部はカンタブリア山脈などを抱える山がちな地形という地理的多様性から, 上に挙げた大分類ではまとめきれない言語的に多様な側面を有している。山を挟んで隣り合った集落でも, 共通する言語的特徴がある一方で大きく異なった言語的特徴も多々見出される。

このような個々のアストゥリアス方言は伝統的にバブレ (bable) と呼ばれている。この用語の用法

3 アストゥリアス言語アカデミー (略号は A.L.L.A.) の担当者に以前確認したところ, 『アストゥリアス語文法』 (Gramática de la llingua asturiana) の略号は特に決まっていなかったが, Gramática と呼んでいるとのことであった。また『アストゥリアス語辞典』の場合には DALLA の略号を用いるとのことであった。

4 例えば州都オビエド Oviedo は Uviéu という表記になる。

5 アストゥリアス方言の3分類 (中央, 西部, 東部) はメネンデス・ピダルによるものであるが, 西部アストゥリアス方言は西部レオン方言に含まれる。したがってレオン方言的特徴とされるものは, 時として, 中央, 東部アストゥリアス方言と対立する場合が多く見られる。

を拡大させて、アストゥリアス方言全体を指すのに用いられることもあるが、その多様な側面により、この用語は複数形で *bables* (「諸バブレ」) と用いられることが多い。

以下、§1. 接頭辞 *per-*、§2. 接尾辞 *-in* と *-ucu*、§3. 1, 2 人称複数の人称代名詞、§4. 3 人称の間接目的格人称代名詞、§5. 所有詞、§6. 定冠詞 の順で論を進めていく。

## 1. 接頭辞 *per-*

### 1.1. 生産的な接頭辞

『レオン方言』(§14.)によると古典ラテン語の *per* は形容詞に最上級の意味を付け加えたり、動詞の意味を強化するのに用いられるという用法が紹介されており、その例として *per-imbecillus* 「とても弱い」、*per-illustris* 「非常に明白な」、*per-durabilis* 「非常に持ちこたえ得る」、*per-donare* 「許す」といった例が挙げられている<sup>6</sup>。

この接頭辞は、『レオン方言』によると、アストゥリアスでは「まったくもって生産的」であるとされており、それを形容詞に用いた例として *peramoriau* 「とても酔った」、*perciegu* 「完全に目が見えない」、*perllocu* 「とても気の違った」、*perfechu* 「とてもよく出来た(完璧な)」などが、動詞の例としては *peracabar* 「完全に終える」などが挙げられている<sup>7</sup>。アストゥリアスの例のみであり、これが他のレオン方言域でも確認出来る特徴かどうかは同書からは読み取れない。

### 1.2. 標準アストゥリアス語の接頭辞

これらは現代の標準アストゥリアス語ではどのような状況であろうか。『文法』によると接頭辞 *per-* は、「生産的でそれを用いることで[本来の]範疇を変えることなく、形容詞、副詞、動詞と結びつく」(『文法』§21.3.3.)としている。そしてそれは、形容詞や副詞に用いられる場合、最上級の度合いの「とても」の意味であり、動詞に用いる場合には「完全に」の意味であるとしている。

#### *per-*+形容詞、副詞 「とても～」の意味

*bien* 「よく」→*perbién*, *blancu* 「白い」→*perblancu*, *bonu* 「良い」→*perbonu*, *ceo* 「ゆっくりと」→*perceo*, *cerca* 「近くに」→*percerca*, *dafechu* 「しばしば」→*perdafechu*, *fatu* 「愚かな」→*perfatu*, *grande* 「大きい」→*pergrande*, *humilde* 「慎ましい」→*perhumilde*, *lloñe* 「遠くに」→*perlloñe*, *mal* 「悪く」→*permal*, *malu* 「悪い」→*permalu*, *munchu* 「沢山の」→*permunchu*, *nidiu* 「滑らかな」→*pernidiu*, *pocu* 「わずかな」→*perpocu*, *roxu* 「赤い」→*perroxu*, *tarde* 「遅く」→*pertarde* 等

#### *per-*+動詞 「完全に、全て」の意味

*acabar* 「終える」→*peracabar*, *andar* 「歩く」→*perandar*, *comer* 「食べる」→*percomer*, *correr* 「走る」→*percorrer*, *durar* 「続く」→*perdurar*, *facer* 「する」→*perfacer*, *ser* 「～である」→*perser*, *siguir* 「後に続く」→*persiguir*, *tar* 「～である」→*pertar*, *tener* 「持つ」→*pertener* 等

ここに挙げた接頭辞 *per-* の付いた形式のうち、*percorrer* 「そこらを歩き回る」、*persiguir* 「追跡する」以外は A.Ll.A. の発行した『辞典』に記載されていないことから、随意的な用法であることがわかる。

6 古典ギリシャ語の例として *περικαλλής* 「とても美しい」、*περικλεής* 「とても有名な」といった例も挙げられている。

7 これら以外にも『レオン方言』には *perroin*, *perroer*, *perferver* が挙げられている。

『レオン方言』にはこの per- という接頭辞のみが取り上げられていたが、per- ほどの例はないものの、『文法』には per-, des-~de- (反対の意味や動作)<sup>8</sup>, es-~e- (外へ), ex- (前), micro- (小さな), mono- (一つの, 単一の), multi- (多くの), neo- (新しい), pos- (のちの, あとの), re- (反復), requete- (ととも), seudo-~pseudo- (偽の), sobre- (上の, のちの), sub- (下), tri- (3の), uni- (1の), vice- (代わりの), が生産的な接頭辞の例として挙げられている<sup>9</sup>。

## 2. 接尾辞 -ín と -ucu

### 2.1. -ín の分布

ラテン語の -inus に由来する接尾辞 -ín は、『レオン方言』 (§15.) によると、レオン方言域北西でよく用いられているという。ただしカスティーヤ語の語彙にも若干確認されているが (espadín 「礼装用短剣」, polvorín 「火薬庫」, camisolín 「胸当て」), これらはレオン方言とは偶然の一致であるとされ、ビエルソ (レオン県) やいくつかの地域で見られる -iño の語尾は、対応するポルトガル語の -inho と交替した用法であるとしている。

-ín はポルトガル語の -inho と同様に縮小辞としての用法があり、アストゥリアス方言では一般的で特徴的なものとなっているという。その例として zapatín, guapín, pequeñín, pequeña, muyerina, prontín, cerquina, callandín が挙げられている<sup>10</sup>。

現在の標準アストゥリアス語の状況を確認する。『文法』 (§21.3.2.2.) が述べるところによると、-ín, -ina, -ino が生産的な接尾辞として挙げられている。これらは名詞、形容詞、副詞に用いられ、その意味としては①縮小辞: camín 「道」→caminín, casa 「家」→casina, rapaz 「少年」→rapacín, blancu 「白い (男性単数)」→blanquín, cerca 「近くに」→cerquina, tarde 「遅くに」→tardino, など。②本来のものではないが「似た」の意味: madre 「母」→madrina 「代母」, padre 「父」→padrín 「代父」, などが挙げられている<sup>11</sup>。

そしてこの接尾辞は、『レオン方言』 (id.) によればサンタンデルでも用いられており、サラマンカの例としてはファン・デル・エンシーナ<sup>12</sup>が nuevecita, ルカス・フェルナンデスが palmadina, トーレス・イ・ビヤロエルが santinas をそれぞれ作品中で用いているとしている。ただし、当時メネンデス・ピダルはサラマンカで実際の用例を確認していないと記しているが、更に南に下ったエクストゥレマドゥーラでの実際に用いられていた例を挙げている。

### 2.2. -ucu の分布

-ín と同義の用法のある縮小辞として、『レオン方言』は -uco を挙げている。サンタンデルでは -ín よりも多用されているとし、casuca (<casa), hombruco (<hombre), cercuca (<cerca) といっ

8 de-, e- はいずれも s- 或いは x- で始まる語の前での形式である。そして~の記号は交替形の出現を意味する。即ち A~B は A 又は B の意味である。

9 『文法』 (§21.3.3.) にはこの他に半生産的 (semiproductivu), 非生産的 (improductivu) な接頭辞の例が挙げられている。

10 それぞれ zapatu 「靴」, guapu 「かわいい」, pequeñu 「小さい」, muyer 「女」, pronto 「早く」, cerca 「近くに」, callando 「黙った」に語尾が付いたものであろう。

11 『文法』にはこれとは別項立てで半生産的な、-ín, -ina, -ino が、名詞、動詞を形容詞化する接尾辞として挙げられている。

12 サラマンカの「田舎の発話」に関して、メネンデス・ピダルは主に以下の3人の作家の作品の中から度々引用している。ファン・デル・エンシーナ (Juan del Encina, 1469?-1529?), その弟子のルカス・フェルナンデス (Lucas Fernández, 1474-1542), 時代は下って18世紀に活動したディエゴ・デ・トーレス・イ・ビヤロエル (Diego de Torres y Villarroel)。ホセ・ガルシア・ロペス (1976), pp. 68-70, 175-176。

た例が挙げられている。逆にアストゥリアスでは -uco は -in 程は用いられず、軽蔑的な意味を伴っているとしている。

現代の標準アストゥリアス語でも (『文法』, § 21. 3. 2. 2.), -ucu, -uca, -uco, は「縮小辞, 時として軽蔑的な意味」を伴うとしている。例として casa 「家」→casuca, monte 「山」→montucu, muyer 「女」→muyeruca~muyerucu, grande 「大きい」→granducu, tarde 「遅く」→tarducu, 等が挙げられている。

以上のことから標準アストゥリアス語にこのレオン方言的である, 生産的な接尾辞が用いられていることが確認出来る。

### 3. 1, 2 人称複数の人称代名詞

#### 3. 1. 強勢形 nós, vós

『文法』にはアストゥリアス語の人称代名詞は強勢形 (主格, 及び前置詞格) として, 1 人称複数の nosotros (女性形 nosotres), 2 人称複数の vosotros (女性形は vosotres) と並んで, それぞれ nós と vós (いずれも男女同形) の形式がその交替形として挙げられている。

後者のこの 2 つの形式は, 『レオン方言』 (§ 17.1.) によれば古形であるとされ, アストゥリアスで用いられる例以外にもレオン方言域で用いられる例を挙げている。

まずアストゥリアスの例としては probes de nós 「可愛そうな私たち」, fúise con vós 「彼は君たちと立ち去った」, nós donde vamos? 「我々はどこに行くのか」を提示している<sup>13</sup>。

サンタンデルのカブエルニガ, ベーニャス・アリーバの例として, más avisaos que nós 「私たちよりも抜け目のない」, アストルガ (レオン県) の例としては ¿por qué non lo facedes vós? 「どうして君たちはそれをしないのだ」等が挙げられている。

ミランダ・ド・ドウロの例として, cū nos 「私たちと一緒に」, cū vos 「君たちと一緒に」<sup>14</sup> が挙げられており, 対応するポルトガル語の conosco, comvosco との相異を提示することで, ミランダ方言のレオン方言的特徴が際立たされている。

ちなみに『レオン方言』には西部アストゥリアスの例として, 二重母音を伴う nosoutros, vosoutros という形式を挙げているが, 『アストゥリアスのガリシア語』 (p. 34) では nosoutros (女性形は nosoutras), vosoutros (女性形は vosoutras) とともに, それぞれ nós, vós の形式も提示されている。

#### 3. 2. 無強勢形 nos, vos

同じく『レオン方言』には, 「(……) 更に vos が前接として用いられる場合には v は消失しない」 (『レオン方言』 § 17.1.) との記述がある。これは無強勢人称代名詞 (直接, 間接目的格代名詞, 再帰代名詞) がカスティーヤ語では os であるが, レオン方言では強勢形と同形の v- を伴った vos を用いるという意味である。

この形式は標準アストゥリアス語でも 2 人称複数の無強勢人称代名詞に用いる形式として, 『文法』 (§ 18. 3. 1. 1.) にも記載されている。

13 本稿では強勢の nós, vós には, 無強勢との区別のためにアクセント記号を付けた。

14 cū はカスティーヤ語の前置詞 con に対応する。ū は鼻音を表し, ポルトガル語の特徴である。ミランダ方言はその影響下にある。

『レオン方言』(id.)にはアストゥリアスの例として、non vos lo díxe?「君たちに私はそのことを言わなかつたらどうか」、va pegá'vos<sup>15</sup>「彼は君たちを叩くだろう」が挙げられている。

そしてアストルガの例としては、Dios vos guarde「主が汝らを守りたもうことを」が、ミランダ・ド・ドウロの例としては you veio-vos a vós「私は君たちに会う」が挙げられている。

#### 4. 3人称の間接目的格人称代名詞

##### 4.1. 標準アストゥリアス語の特徴

『文法』によると標準アストゥリアス語の間接目的格人称代名詞は以下の形式が用いられるが、特に3人称の形式がカスティーヤ語と大きく異なる。

	単 数	複 数
1人称	me	nos~mos
2人称	te	vos
3人称	-y	-yos~-ys

3人称の -y, -you~-ys は、ハイフンを介して先行語と結びつき一語となる。

〈例〉Llevó-y les maletes.「彼にスーツケースを運んだ」

3人称の直接目的格代名詞が後続して用いられる場合にも、これらの形式は保たれる。

〈例〉Cómpro-y lu.「私は彼にそれを買う」<sup>16</sup>

対応する現代カスティーヤ語の形式はそれぞれ Le llevó las maletas., Se lo compro. であり、語順に加え形式も大分異なることに気付く。

##### 4.2. レオン方言での硬口蓋音の保存

これらの形式は『レオン方言』によるとレオン方言的特徴であり、古形が保たれた結果であるという。以下にその分析を行う。

まず古文書の例として、間接目的格の硬口蓋音を伴う ll- の形式は、単独で用いられる場合にも直接目的格を伴う場合にも同様に保存されている(『レオン方言』§17.2.)。

〈例〉quando lle prestardes「君たちが彼に貸すときに」

nin lli los cuella「彼からそれを取り上げないように」

gelo gradeçio「彼にそれを感謝した」

間接目的格人称代名詞3人称は、レオン方言もカスティーヤ語もラテン語の illi にさかのぼり、>\*ille を経て<sup>17</sup>カスティーヤ語では >le となった。複数の場合は illis > les である(『手引書』§94.3.)。

語頭の母音が消失したのは前接用法が多いことが原因であり、ll- が l- となった理由は、カスティーヤ語の場合、ll- を語頭と子音に後続の位置で用いないという傾向によるものであるが、レオン方言の推移の結果について、『手引書』は以下のように記述している。

「全ての語頭の母音の前で与格 [=間接目的格代名詞] の lli を母音間のもと捉える傾向を有し、(……)」

15 対応するカスティーヤ語では va a pegaros. アストゥリアス方言(及び標準アストゥリアス語)では不定詞に無強勢人称代名詞が前接する場合には、語末の -r が消失する。標準アストゥリアス語の正書法に従うと、va pegavos となる。廣澤(2007)。

16 標準アストゥリアス語の無強勢人称代名詞の位置に関しては、廣澤(2006a)で扱った。

17 この章では\*の記号は推定形をあらわす。

そののち前接の与格の特徴として語頭の口蓋音を伴うようになり、子音の前でさえそれが一般化した。」  
 (『手引書』 §94.3.)

例として *dio-yi mucho* 「彼に沢山与えた」、*dioyis* 「彼らに与えた」が挙げられている。古形として、*diolleslo* 「彼らにそれを与えた」、当時の例として *dioyislu* 「彼らにそれを与えた」(『手引書』 id.) が挙げられている。

レオン方言では直接目的格人称代名詞が後続する場合にも、硬口蓋音を伴う、いわば古形の間接目的格人称代名詞が保存されたが、カスティーヤ語の場合には、ラテン語 *illi illum > \*lielo > gelo > se lo* という過程を経た。

直接目的格人称代名詞が伴う場合に3人称の間接目的格人称代名詞はカスティーヤ語で *se* となったのは以上の理由によるものであるが、レオン方言ではこの古形が保たれた。

#### 4.3. アストゥリアスでの状況

『レオン方言』によると、アストゥリアス全域でこの硬口蓋音の間接目的格人称代名詞が保存されているとしている。そしてその形式は単数の *ye*、複数の *yes* 及び *yos*<sup>18</sup> であるとし、『文法』に定められているものとは多少異なるが、「これらの形式はより一般的には縮小した *i* と *is* で出現」(『レオン方言』 §17.2.) し、最も根付いているレオン方言的特徴であると述べている。

『レオン方言』に挙げられているアストゥリアス方言の例を以下に挙げる。

〈例〉 *díxoyelo* 「彼にそれを言った」    *dióyos pan* 「彼らにパンを与えた」  
       *dióilu* 「彼にそれを与えた」    *dióislu* 「彼らにそれを与えた」<sup>19</sup>

これらの特徴はレオン県の西部でも確認され、クルエーニャでは *i pedieu* 「彼に頼んだ」、*diéuila* 「彼にそれを与えた」、*diéuisla* 「彼らにそれを与えた」、アストルガの例としては *ye*、*yes* と並んで *dijolle* 「彼に言った」等が挙げられている。

ただしアストゥリアス以外のレオン方言域では、当時でもあまり良い資料は残っていなかったようであり、メネンデス・ピダルは、サモラの例は確認中であり、サラマンカの例としてはトーレス・ビヤロエルの著作から *llo pusieron un vestido* 「彼に衣装を着せた」という *loísmo* の形式の硬口蓋要素を伴う間接目的格人称代名詞を挙げているが、『レオン方言』執筆当時(20世紀初頭)には既に、サラマンカには確実に残っていないとしている。

### 5. 所有詞

#### 5.1. 西部と東部の相異

『レオン方言』(§17.3.) は古文書で多用される所有形容詞の形式として、以下のものを挙げている。

	1人称		2人称		3人称	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数
男性	<i>mio</i>	<i>mios</i>	<i>to</i>	<i>tos</i>	<i>so</i>	<i>sos</i>
女性	<i>mia</i>	<i>mias</i>	<i>tua</i>	<i>tuas</i>	<i>sua</i>	<i>sua</i>

18 *yos* はロイスモ (*loísmo*) の形式であるとしている。ロイスモは通常間接目的格代名詞 *le* の代わりに *lo* が用いられる現象で、スペイン北部、中部で見られる特徴である。山田 (1995, p.105)。

19 標準アストゥリアス語の正書法に従った表記を参考に挙げると、*díxo-ylo*, *dió-yos pan* (*dió-ys pan*), *dió-ylu*, *dió-yoslu* (*dió-yslu*) となる。

古文書の例を提示しているのは、かつて男女の形式を区別していたことを確認するためである。

「これらの古形から中央及び東部アストゥリアス方言では男性形の *mió, to, so* のみを保持した。これらは女性形に対しても [つまりその代わりに] 用いることが出来る。しかし西部アストゥリアスとレオン県では [所有形容詞に] 性の区別があり、それは俗ラテン語に存在していた相異に対応するもので、強母音に反映されている」(『レオン方言』 § 17. 3.)。

同じレオン方言であっても、標準アストゥリアス語の元となったとされる中央アストゥリアス方言では男性形のみが保存され、性の区別なく用いられる。一方西部アストゥリアス方言では性の区別をした所有詞が用いられる。

『文法』で標準アストゥリアス語の所有詞を確認すると、前置形と後置形 A 型、後置形 B 型、迂言形の 4 種が記載されている。

## 5. 2. 標準アストゥリアス語の所有詞前置形

以下に示すのが、標準アストゥリアス語の所有詞前置形である。

			男性形	女性形
単数の所有者	1 人称「私の」	単数	el mio	la mio
		複数	los mios	les mios
	2 人称「君の」	単数	el to	la to
		複数	los tos	les tos
	3 人称「あなたの」「彼の」「彼女の」	単数	el so	la so
		複数	los sos	les sos
複数の所有者	1 人称「私たちの」	単数	el nuesu~el nuestru	la nuesa~la nuestra
		複数	los nuevos~los nuestros	les nueses~les nuestros
	2 人称「君たちの」	単数	el vuesu~el vuestru	la vuesa~la vuestra
		複数	los vuestos~los vuestros	les vueses~les vuestres
	3 人称「あなた方の」「彼らの」「彼女らの」	単数	el so	la so
		複数	los sos	les sos

(『文法』 § 10. 1. 1.)

全ての形式において修飾する名詞の性数と一致した定冠詞が先行し、いずれの形式も強勢語であるというこの 2 つの特徴は、標準アストゥリアス語のみならず、個々のアストゥリアス方言 (バブレ) にも共通である<sup>20</sup>。

1, 2 人称複数を除いて、男性、女性形が同形態で単複のみの区別しかないところから判断すると、『文法』の所有 (形容) 詞前置形は、『レオン方言』が述べているアストゥリアス中央・東部地域の特徴が反映したものであるといえる。即ち標準アストゥリアス語では *el mio neñu* 「私の息子」、*los mios neños* 「私の息子 (子ども) たち」、*la mio neña* 「私の娘」、*las mios neñes* 「私の娘たち」といった表現からも確認出来るように、*mio, mios* と単数、複数の区別はあるが、男性、女性のはいずれの場合も同形態である。即ち *\*la mia*<sup>21</sup> という形態は用いられないのである。

20 Neira Martínez (1976, p.108)。

21 この章での\*の記号は非文法的なものを意味する。



### 5.3. 西部レオン方言的特徴の標準アストゥリアス語への反映

一方『レオン方言』 (§17.3.) に記載されているアストゥリアス西部とレオン県西部 (両方合わせて「西部レオン方言」) の特徴としては, el miéu cabriu 「私の仔牛」 (複数の形態は miéus), la mię cabra 「私のヤギ」 (複数の形態は mięs) といった例から確認出来るように, 名詞の性が形態に反映している。以下に示すように標準アストゥリアス語にはこれらの特徴がどのように反映されているかを確認する。

『文法』には所有詞後置形として A 型と B 型の 2 系列を挙げている。以下に標準アストゥリアス語の所有詞後置形 A 型の形式を示す。

			男性	女性	中性
単数の所有者	1 人称「私の」	単数	mio		
		複数	mios		
	2 人称「君の」	単数	to		
		複数	tos		
	3 人称「あなたの」「彼の」「彼女の」	単数	so		
		複数	sos		
複数の所有者	1 人称「私達の」	単数	nuesu~nuestru	nuesa~nuestra	nueso~nuestro
		複数	nuesos~nuestros	nueses~nuestres	
	2 人称「君達の」	単数	vuesu~vuestru	vuesa~vuestra	vueso~vuestro
		複数	vuesos~vuestros	vueses~vuestres	
	3 人称「あなた方の」「彼らの」「彼女らの」	単数	so		
		複数	sos		

(『文法』 §10.1.2.1.)

A 型は前置形から定冠詞を取り除いただけであり, 同様に全て強勢語である。そして 1, 2 人称複数以外は数の区別をする形態のみ伴う。これは『レオン方言』でいう中央, 東部アストゥリアス方言の特徴が反映したものであるといえよう。

標準アストゥリアス語の所有詞後置形 B 型は以下の形式である。

			男性	女性	中性
単数の所有者	1 人称「私の」	単数	míu	mía	mío
		複数	míos	míes	
	2 人称「君の」	単数	tuyu	tuya	tuyo
		複数	tuyos	tuyes	
	3 人称「あなたの」「彼の」「彼女の」	単数	suyu	suya	suyo
		複数	suyos	suyes	
複数の所有者	1 人称「私達の」	単数	nuesu~nuestru	nuesa~nuestra	nueso~nuestro
		複数	nuesos~nuestros	nueses~nuestres	
	2 人称「君達の」	単数	vuesu~vuestru	vuesa~vuestra	vueso~vuestro
		複数	vuesos~vuestros	vueses~vuestres	
	3 人称「あなた方の」「彼らの」「彼女らの」	単数	suyu	suya	suyo
		複数	suyos	suyes	

(『文法』 §10.1.2.1.)

A型、B型のいずれにも意味の上での相違はなく、B型は全ての形式で標準アストゥリアス語の形容詞と同様の性数変化が形態に反映される。このB型には『レオン方言』でいう西部レオン方言（西部アストゥリアス方言及び西部レオンの方言。本稿 §5.1. で言及）の特徴が反映されているといえる。

つまりまとめると、A型は、

el neñu mio「私の男の子」、el dineru mio「私のお金」

la casa mio「私の家」、la lleña mio「私の薪」

といったように、mioは女性形に対しても用いられていることから、中央、東部方言の特徴が反映したものであるといえる。

一方B型は、

el neñu míu (míuは男性形単数)、el dineru míu (míuは中性形)

la casa mía (míaは女性単数形)、la lleña míu (míuは中性形)

といった例からも分かるように、男性、女性、中性の形態の区別があり、西部レオン方言の特徴を備えたものとなっている<sup>22</sup>。

因みに『文法』は、基本的に性の区別をしないA型の方が、標準アストゥリアス語の規範の上では好ましい旨を述べている (§10.1.2.)。これは標準アストゥリアス語が中央アストゥリアス方言を背景に作り上げられたことに起因するものなのかも知れない<sup>23</sup>。

## 6. 定冠詞

### 6.1. レオン方言の男性形の lo

『文法』 (§8.1.) によると標準アストゥリアス語の定冠詞は以下に示すものとなっている。

	男性	女性	中性
単数	el	la	lo
複数	los	les	

一見して分かるように、カスティーヤ語の定冠詞と同じ形態が用いられている。これはアストゥリアスの各バブレ（アストゥリアス方言）に共通の形式であると捉えてよい<sup>24</sup>。『レオン方言』でもそれに言及しているが、男性単数に用いられる lo という特徴を示す形態についても述べている。

「カスティーヤ語におけるのと同様に、主格の ille に由来する el という形式と並んで、レオン方言には対格の illum から派生したもう1つの形式 lo が存在する（ガリシア語、古ポルトガル語と同様。ただし現代は o [と言う形態]）」（『レオン方言』, §17.4.）

この lo の形式は、ラテン語の指示詞の中性形 illum から >elo>lo~lu と派生した。これはガリシア語と同様の推移である。

22 標準アストゥリアス語の所有詞、所有詞迂言形については廣澤 2006b, 形容詞の形態及び中性形については廣澤 2006a で解説した。

23 一方形容詞の語尾に関しては、所有詞とは異なり、中央・東部アストゥリアス方言では中性を区別するのに対し、西部アストゥリアスでは区別しない。その地域的相違に関しては別の機会に扱いたい。

24 Neira Martínez (1976, p.189)。

## 6.2. 標準アストゥリアス語での状況

『レオン方言』ではこの *lo* の形式は、レオン方言全体の特徴としては前置詞支配として用いられる場合に出現する例を挙げている。そしてアストゥリアスに関しては以下のように記述している。

「アストゥリアスではこの *lo* が保存されており、単なる前置詞支配の場合ではなく、融合する場合にのみ保存されている」(『レオン方言』, § 17.4.)

ここでの「融合」とは縮約 (*contracción*) のことである。そしてその例として *potcho mundo*, *cono*, *eno* (あるいは *no*) が挙げられている。これらは標準アストゥリアス語では *pol*, *col*, *nel* にそれぞれ対応する。即ち『文法』には縮約形においても男性単数形の *lo* を想定させる形式は記載されていない。以下に標準アストゥリアス語の前置詞+定冠詞の縮約形を挙げる。

前置詞 \ 定冠詞	el	la	lo	los	les
a 「～へ」	al	(a la)	(a lo)	(a los)	(a les)
de 「～の」	del	(de la)	(de lo)	(de los)	(de les)
pa 「～のために」	pal	(pa la)	(pa lo)	(pa los)	(pa les)
so 「～の下に」	sol	(so la)	(so lo)	(so los)	(so les)
con 「～と」	col	cola	colo	colos	coles
en 「～に」	nel	na	no	nos	nes
per 「～を通過して」	pel	pela	pelo	pelos	peles
por 「～なので」 <sup>25</sup>	pol	pola	polo	polos	poles

(カッコ内は縮約が起こらない場合の組み合わせである。『文法』 § 8.1.2.1., 廣澤 2006b, § 1.2.1.)

このように標準アストゥリアス語では男性単数の定冠詞に *lo* という形態は認められないが、ネイラ・マルティネス (Neira Martínez, Jesús, 1976, p. 189.) はそのことに関して、西部アストゥリアス方言域に *lo* の名残があるとしているが、「全てのバブレ [個々のアストゥリアス方言] における現在の形式は *el* である」(p. 189) としている。

「レオン方言」と「標準アストゥリアス語」は対立するものであろうか。メネンデス・ピダルが『レオン方言』の中でレオン方言的として取り上げている特徴の中には、西部レオン方言、即ち西部アストゥリアス方言に特に際立ったものが多い。本稿の冒頭 (§ 0.2.) でも述べたように、標準アストゥリアス語は中央アストゥリアス方言を元に定められたとされている(形容詞の中性に独自の形態を設けたことなどにもそれは現れている)。したがって、時として対立しているように見える「レオン方言」と「標準アストゥリアス語」は、「西部アストゥリアス方言」と「中央、東部アストゥリアス方言」の対立と置き換えると分かりやすい。この章の定冠詞に関しても同様のことが言えそうである。

25 前置詞は日本語の複数の意味に対応する場合があるが、参考として代表的な訳を一つ挙げた。

## 参考文献

- Academia de la Llingua Asturiana (=A.Ll.A.) (ed.) (2000). “*Diccionariu de la Llingua Asturiana*” (=『辞典』), Oviedo: Academia de la Llingua Asturiana
- Academia de la Llingua Asturiana (ed.) (1998, 2001<sup>3</sup>). “*Gramática de la Llingua Asturiana*” (=『文法』), Oviedo: Academia de la Llingua Asturiana
- Academia de la Llingua Asturiana (ed.) (2000). “*Nomes de conceyos, parroquies, pueblos y llugares del Principáu d’Asturies*”, Oviedo: Academia de la Llingua Asturiana
- Academia de la Llingua Asturiana (ed.) (1981, 2000<sup>5</sup>). “*Normes Ortográfiques*” (=『正書法』), Oviedo: Academia de la Llingua Asturiana
- Andrés, Ramón d’ (1997, 1999<sup>3</sup>). “*Gramática práctica de asturiano*”, Mieres del Camín: Editora del Norte
- Andrés, Ramón d’ (2003). “*Primeres llecciones d’asturianu*”, Oviedo: Publicaciones Ámbitu
- Cano González, Ana María (2002). ‘*Evolución lingüística interna del asturiano*’, “*Informe sobre la llingua asturiana*”, Oviedo: Academia de la Llingua Asturiana
- 廣澤明彦 (2001). 「中央アストゥリアス方言の形容詞中性形について」, 『語学研究』96号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 107-123
- 廣澤明彦 (2006a). 「アストゥリアス語の形容詞について」, 『学苑』787号 (昭和女子大学近代文化研究所), pp. 1-12
- 廣澤明彦 (2006b). 「アストゥリアス語の定冠詞, 指示詞, 所有詞について」, 『拓殖大学語学研究』112号, pp. 117-147
- 廣澤明彦 (2007). 「アストゥリアス語の人称代名詞について」, 『学苑』799号 (昭和女子大学近代文化研究所), pp. 12-23
- ホセ・ガルシア・ロペス著, 東谷頼人ほか訳 (1976). 『スペイン文学史』東京: 白水社
- 亀井孝ほか編 (1996). 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京: 三省堂
- Matthews, Peter H. (1997). “*The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*”, Oxford, New York: Oxford University Press
- Mesa prá defensa del galego de Asturias de da cultura de comarca (1990). “*Normas ortográficas e morfolóxicas del galego de Asturias*” (=『アストゥリアスのガリシア語』), Eilao: Mesa prá defensa del galego de Asturias de da cultura de comarca (MDGA)
- Menéndez Pidal, Ramón (1906, 2006). “*El dialecto leonés*” (edición conmemorativa 1906-2006) (=『レオン方言』), León: El Búho Viajero
- Menéndez Pidal, Ramón (1904, 1999<sup>23</sup>). “*Manual de gramática histórica española*” (=『手引書』), Madrid: Espasa Calpe
- Neira Martínez, Jesús. (1976). “*El bable. Estructura e historia*”, Gijón: Ayalga Ediciones
- Prieto Alonso, Esther (2004). “*Gramática d’asturianu*”, Oviedo: Trabe
- Sánchez Vicente, Xuan Xosé (1996). “*Diccionariu asturianu-castellanu castellanu-asturianu*”, Oviedo: Trabe
- 山田善郎 (監修) (1995). 『中級スペイン文法』, 東京: 白水社

(ひろさわ あきひこ 総合教育センター)